

例会記録

日本医史学会 3月特別例会「大塚恭男先生をしのぶ会」平成22年3月27日(土)

順天堂大学医学部10号館2階カンファレンスルーム

1. 戦後の日本漢方医学界の展望 原 桃介
2. 大塚恭男先生の人と仕事 小曾戸洋
3. 大塚恭男先生の思い出
日高三郎・大澤仲昭・岡田靖雄
酒井シヅ・川瀬 清・花輪壽彦
4. ご遺族よりご挨拶

日本医史学会 4月例会 平成22年4月24日(土)
順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 扁鵲画像の変遷 天野陽介・小曾戸洋
2. 『断毒論』と『国字断毒論』
『翻訳断毒論』の比較(漢方医学の立場から)
西巻明彦

日本医史学会 5月例会 平成22年5月22日(土)
順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 第11回日本医学会と医学用語整理事業
澤井 直
2. 巫者の病気観と治療
一八丈島での事例から一 土屋 久

例会抄録

母乳をめぐる自然概念の歴史的変遷

梶谷 真司

「子供は母乳で育てるのが自然である」という主張は、歴史のなかで繰り返しなされてきた。しかし、これはけっして普遍的な真理を表しているわけではなく、そこで何を「自然」と見なすかは時代によって大きく異なる。しかもこの「自然である」という言葉は、たんなる形容詞ではなく、物事の正しいあり方を示す規範概念であり、その裏には常に何らかの批判対象がある。この批判されるべきものは、時代や社会によって異なるため、表面的に同じ主張であっても、その意味内容が変わってくる。この発表では、時期を近世(江戸)、近代(明治から高度成長期前)、現代(高度成長期以降)に分け、時代ごとに何をどう理由で批判するために「自然」がもち出されたのか、他のどんな種類の乳に対して母乳を与えるのがよ

いと言われるのかを、医者の書いた育児書を手がかりに考察した。

まず江戸時代についてであるが、母乳について医師が「自然」をもち出すとき、それは何よりも乳母に対する警戒と結びついていた。そのさい問題であったのは、母親としての愛情や義務ではなく、乳母という卑賤な身分の気血が、乳を通して子どもに影響し、体質のみならず、気質、品性までが劣悪化することへの危惧であった。ここでは、身分差を不用意に侵犯しないことが「自然」なのである。さらに江戸時代には、生まれた子供に初めて与える乳は他人からもらう「乳つけ」という慣習があった。これは、実際的には、出産後乳が出るようになるまでの代理授乳の面もあるが、共同体の絆の中で子供が丈夫に育つための願